夢語り　～語り部の思い～

kirito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢語り　～語り部の思い～

【Ｎコード】
Ｎ６１２４Ｔ

【作者名】
ｋｉｒｉｔｏ

【あらすじ】
ヒカルの一生をオリキャラ視点でという内容になります。
１１で碁をはじめ３２で死ぬまで、ではありますが、かなり簡略されています。
ヒカルがアキラにもし自分の口で伝えられなかったときのために、と偶然知り合った作家に自伝の依頼をする話です。
これから後に考えつけは自伝の中身を長編で書いてみたいなぁと思っています。

私は彼に頼まれていたものをついに日の目にさらすときがきたのだと感じた。
長かったのか。
短かったのか。
それについてはわからないような気がする。

本当はもっともっと後だと思っていたのは事実だろう。

彼がこんなにも早く。
貪欲にその一手を求め、そして、そのままいなくなってしまうとは考えてもみなかったのだ。

それを頼まれたのは、彼がまだ十代の頃だった。

彼のこれまでの道筋を。
一冊の本にしてみないかと頼まれたのは。

彼をはじめて見たのは、私が２８のときだったと思う。
５月の初め。
まだ肌寒い風が吹いていた夕暮れ。
私は、駆け出しというべき位置にいた作家の一人で。
この道を一生続けることができることを誰よりも楽しんでいた時だったように思う。

両手に平安時代の資料を大量に詰めた紙袋をもって川べりの道をのんびりと歩いてアパートへ向かっていた。

そんな折に、彼を見つけた。
彼は両目を真っ赤にして、でも涙は流さずにじっと川の流れを眺めていた。
私はそのとき彼が自殺でもするのではないかと思っていたので、両手に下げた資料を投げだして声をかけていた。

彼は大事な人が自分のせいで居なくなったのだと言った。
私にはよくわからなかったが、それを望んだのは彼では？と返してみた。
すると彼は違う！と怒鳴り返してきた。

――俺が悪かったんだ。
――あいつがあんなに打ちたがってたのに。
――俺があいつに打たせなかったから。
――だからあいつ、俺から居なくなったんだ。
――あいつ、俺にずっと一緒だって言ったのに。
――俺があいつを消しちまったんだ！

彼の言葉の意味は私にはよくわからなかった。
何を打つのか、なぜ居なくなったのか、そして、人に対して使わないだろう【消した】という言葉。

私にわかったのは、彼がひどく傷ついているということだけだった。

私は彼に何を言えばよいのかわからなかった。
私には夢があって。

彼のように何かを失ったということは今までなかったからだ。
父も母も健在で、今の仕事も自分のしたいこと。
挫折はあったが、それは乗り越えてきたからこそここに居るのだが、それとは違うだろうし。

傷つけない言葉も、慰める言葉も、まったく思いつかなかった。

すると彼は急に帰ると言い出した。
帰らないといけないからと。

私は彼を送ると言ったが、彼は要らないと断って川べりへと上っていった。

私は彼のことが気にはなったが、これ以上何を言えばよいのかわからなかったし。
見ず知らずの他人にこれ以上干渉されるのがいやなのかもしれないと思い直した。

「ねえ！」

上の方を向くと彼が私に呼びかけていた。
なんだろうと思いつつも、返事を返すと、コレと紙袋を彼は見せてくれた。

先ほどまで持っていた紙袋が両手からなくなっていることに気づいていなかった。
私は彼の元へ駆け上がるとありがとうといって受け取った。

「おにーさん、さ。平安時代、好きなの？」

彼が私に質問をする。
私は、この紙袋の中身は確かにそれ関係ばかりだったと思った。
「私は駆け出しの作家だよ。これは資料」
そう、といって彼は私が彼と会うまで歩いてきた道に駆けていった。
気がつけばもう辺りは薄暗くなってきている。
私はやはり危ないのではと彼の背を探したが、すでに見当たらず、
あきらめアパートへと帰ることにした。

二度目にあったのは、あの時から二年後の冬。
そう、確か、出版社だったと思う。
たまたま、偶然居合わせて、気づいたのは彼のほうだった。
「あれ？　あのときのおにーさん？」
「え？」
私は何のことだろう？と声をかけてきた少年を見た。
どこかであっただろうか？と思いつつも考えるが、よく思い出せない。
「覚えてない？　えっと2年くらい前、川べりであったお兄さんじゃない？」
川べり……そこまで言われて思いだす。
確かにあの時であった彼と目の前の少年は似ている、と思う。

私はなぜここに？と聞き、彼は取材、と答えた。
何をしているんだろうと思っていると、彼は少し話さないかと言ってきた。
私も予定は終わっていたからかまわないと答えて、彼と二人で自販機横の長椅子に座った。

彼との話は思いのほか楽しいものだった。
彼が今１７歳で、囲碁のプロをしていること。本因坊選というリーグで順調に勝ち進んでいるということ。このまま上手くいけば挑戦者になれるかもしれない、など。
１０分くらいたったころに彼はもう行かないとと椅子から立ち上がった。

私は、ちょうどできたばかりの本を彼に手渡していた。
平安時代をモチーフにしたファンタジーだと。

ありがとうと言って本をリュックへ入れると彼はそのまま立ち去ってしまう。
楽しそうな声と寂しそうな瞳、どちらが本当の彼なのか、私にはわからなかった。

三度目は彼が本因坊を取った翌年。
そう１９歳のときだっただろう。

初挑戦で7番勝負の最後までもつれ込み、僅差で彼が勝ち本因坊の

称号を獲ったのはかれが１８歳の時。
最年少の本因坊だと大々的にニュースになったので私もよく覚えている。
その翌年、彼から手紙が届いたのだ。

自伝に興味はないかと。

私は彼からの珍しい手紙につい返事を出してしまった。
次の土曜日、一日空いてるよと。
電話番号を書いて。

彼からの連絡で私は土曜日の午後2時に、喫茶店で待ち合わせをした。
彼は私が行くよりも早くから来ていて、実は少し驚いたのだ。

私は作家だがノンフィクションを主にしているわけではない。
なぜ？と思いつつも聞いてみると、なんとなくなのだと返された。
ただ、おにーさんなら良いと思ったからだと。

私は少し考えさせてほしいと言い、彼のかまわないと返してきた。
気が向いたら連絡を頂戴と言った彼と私は別れた。

私は結局彼の申し出を受けることにした。
それは、あれから一年も迷った後のこと。
ほかの誰かに決まっている可能性もあったのだが、一応連絡をしてみたところ、私にしか話をしていないと言われとても驚いた。

そのことになると彼は初挑戦で手に入れた本因坊という称号を防衛した後で、かなり有名人になっていたのだから。

彼は私に言った。
信じてくれなくても良いから、そのままを本にして欲しいと。
録音して証拠を残してくれてもかまわないから、と。

よく分からなかったが、私は分かったと言い、彼が暇なときに連絡をもらうことにした。

それともうひとつ約束をした。
彼はこの内容を彼が話すより先には本にして欲しくないから、彼からの連絡が入った後か、彼が死んだ後に本にして出して欲しいと。
何故？と聞いてみたら彼はこれ自体彼が言えなかったときの為の保険なのだと言われてしまった。

私はついかまわないと言っていた。

私と彼はそれから月に1、2度の頻度で会い、少しずつ、話を聞き、話に出てくる棋譜というものの中身を書き出してもらった。
彼がこの棋譜だけは話の途中に載せて欲しいと言われたものには赤い付箋をつけて、ファイリングとメモを続けた。

数年が経つと彼も時間が取りにくくなり、2，3ヶ月の頻度で会うようになる。

彼が２８の頃、五冠とを達成したとテレビで流れていた。
彼が持っていない称号は名人と十段、共にライバルと呼ばれる塔矢アキラが保持しているとも。

それからは、称号の奪い合いもあったのだろう。
大三冠を達成したと入ったのは彼が３０を迎えたときだったと思う。

私は彼に告げられた。
もうそろそろ時間がないのだと。

彼はその意味までは教えてくれず、今までの話を続けるばかりだった。

そして、３２の時。
彼がグランドスラム（七冠）を達成し、そのまま帰らぬ人となった。

そのため、この彼の物語は、彼がグランドスラムを達成する前までしか無い。
いつもは短くても半日以上時間が取れたときに会っていたというのに、あの日は二時間しかないと慌てていた。
それでも時間をとって会った理由は、どこか分かっていたのだろうか？
これが最後だと。

グランドスラムを達成したところは私も知っているので載せてはいるが、彼がどう思い、そんな思いで打っていたのかまでは分からないというべきだろう。

彼と塔矢アキラとの最後の対局。

私はそれでこの彼の自伝を締めくくることに決めた。

本が出来て一番初めに私がしたことは、塔矢アキラへ手紙を送ることだった。
出来た本にも記載しているが、私はこの本の中身はすべて彼が語っ

た内容だと書き記し、本を同封の上郵送した。

私と彼との物語はこれ以上は無い。
彼と出会えたことに感謝と、こんなに早くに居なくなってしまった彼を悼み、私は彼との思い出に蓋をする。

二度とない奇跡に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6124t/

夢語り　～語り部の思い～

2011年6月12日16時11分発行